

東基吉の保育論を反映した《幼稚園唱歌》の編纂

—〈お正月〉の作詞者東くめと作曲家滝廉太郎の仕事—

The Compilation of *Yohchien Shoka* (Kindergarten Songs) and Reflecting the Childcare Theories of
Motokichi Higashi

— The Work of *Oshogatsu* Lyricist Kume Higashi and Composer Rentaro Taki —

谷村宏子*

Abstract

Kume Higashi is a person who was involved in the publishing of *Yohchien Shoka* (Kindergarten Songs), Japan's first collection of songs with unified written and spoken language, in 1901. More than 100 years later, this collection contains songs that are still sung to this day, such as *Oshogatsu* and *Mizuasobi*. Born in 1877, Kume excelled at literature and music. She would go on to be involved in the creation of *Yohchien Shoka* with Rentaro Taki. The collection reflects the childcare theories of her husband Motokichi Higashi, who served as both Professor at the Tokyo Normal School for Girls and as Director of the attached kindergarten. Later, many song collections featuring colloquialisms were published. This paper examines the background behind the rise of advanced song collections with accompaniment parts, conducts a musical analysis of the songs, and introduces the achievements of Kume and Rentaro Taki.

キーワード：幼稚園唱歌 作詞者東くめ 保育論

はじめに

保育の中では《お正月》（もういくつ寝るとお正月…）や《水あそび》（水をたくさんくんできて…）の歌が現在も歌われているが、それらの歌が明治期に作曲された背景や、作詞者や作曲者についてはあまり意識されていない。これらの曲は、1901年（明治34）年に出版された《幼稚園唱歌》¹⁾に収められている。《幼稚園唱歌》には全20曲が掲載され、その緒言に作詞者と作曲者の名前がまとめて記されているが、個々の曲については明記されていなかった。遠藤らの研究によると、水あそびの作詞が滝廉太郎とあり、東くめ（以下「くめ」と呼ぶ）の作詞は12曲となっている²⁾。しかし、くめ自身は13曲を作詞したと1959（昭和34）年に語っている³⁾。これは〈水遊び〉の作詞者が東くめという説と、滝廉太郎という2つの説があり、その真偽が今なお明らかになっていないことによる。本論では、東くめに直接聞き

取りに基づく後者の説に基づいて整理したい。なお作曲は、くめの東京音楽学校時代の2年後輩である滝廉太郎が中心となって行っている⁴⁾。

くめが《鳩ぽっぽ》（鳩ぽっぽ、鳩ぽっぽ、ぽっぽぽっぽと飛んで来い…）をはじめとする幼児向け唱歌の作詞者として一般的に知られたのは、《幼稚園唱歌》が作られて50年以上も経た1958（昭和33）年に、NHK テレビ「私の秘密」に80歳のくめが出演し、歌の作詞を行ったことを番組で語った後のことである⁵⁾。

《幼稚園唱歌》の発刊については、くめの夫である東基吉（以降「基吉」と記す）の影響が強かった⁶⁾。当時、基吉は東京女子師範学校（現：お茶の水女子大学）教授であると同時に、附属幼稚園の初代批評掛⁷⁾でもあった。その附属幼稚園では文部省音楽取調掛編纂の《幼稚園唱歌集》など歌が使われていたが、それらの歌詞が難解で、幼児の発達に沿ったものではないと感じ、くめによく相談したという⁸⁾。

* Hiroko TANIMURA 教育学部教授

くめは学生時代に滝廉太郎の曲の作詞を行っていたことから、新しく幼児のための唱歌をつくることを滝に相談した結果、快諾を得られ、《幼稚園唱歌》の創作に至ったのである。

明治、大正、昭和と重版され、長く日本国中の子どもたちに愛されてきた曲集《幼稚園唱歌》発刊に中心に関わった人物は、提案者の基吉、作詞家くめ、作曲家の滝であった。この3名は、これまでの幼児向けの唱歌が文語体でできていることや、全音階（半音程を含む7音音階）であることから幼児には相応しくないという点を踏まえ、新しく日本の幼児のための口語体の歌を創作する必然性に駆られたといえる。

この《幼稚園唱歌》に関する研究は数多く存在する。たとえば柿岡は、東基吉の談話論・唱歌論において、基吉の理論の視点から東くめの作風について論じている⁹⁾。しかし、くめと滝廉太郎が幼児を対象とした唱歌が、前出の文部省出版の《幼稚園唱歌集》とどのように関わり、またどのように異なるのかについて言及した研究は見当たらない。

そこで本論では、《幼稚園唱歌》誕生の背景にある「基吉」の理論、曲に思いを込めた作詞者「くめ」と作曲家「滝」の考え方と作品の特徴について、文部省音楽取調掛編纂の《幼稚園唱歌集》と比較しながら検討する。

1. 明治期の幼児教育における唱歌教材

幼児教育における最初の唱歌教材は、約100曲からなる『保育唱歌』である¹⁰⁾。これは、東京女子師範学校長である中村正直の、附属幼稚園で唱歌教育を行う必要があるという指示を受けて、1877（明10）年に宮内省式部寮雅楽部の伶人に作曲を依頼したものである。この『保育唱歌』の歌詞は、〈君が代〉にみられるように、『古今和歌集』の一首「わが君は千代に八千代に細れ石の巖となりて苔のむすまで」など古文をあてはめたものが多く、幼児には理解しがたいものであった。歌詞は文語体、音楽も雅楽にもとづくゆったりしたものであり、幼児にとっては日常的なものではなかった。そのためか手書きのまま出版されることがなかった¹¹⁾。

『保育唱歌』ができて10年後の1887（明20）年には、文部省音楽取調掛（現：東京藝術大学）より《幼稚園唱歌集》が出版された¹²⁾。この唱歌集には29曲が掲載され、外国曲のメロディに文語体の歌詞がつ

いた曲が多く登場している。《蝶々》（ちょうちょう、ちょう菜のはにとまれ）といった現在も歌われている歌や《数え歌》（ひとつや）などの日本的な旋律も含まれるなど、改善された面もあった。しかし《心は猛く》（ますらをとしも。いふぞかし）など、幼児にとって理解しにくい言葉も含まれていた。当時の東京女子師範学校附属幼稚園でも歌われていたが、基吉は幼児の興味を惹起する童謡のような口語体による唱歌集を作成する必要があると、「幼稚園保育法」の中で説いている¹³⁾。そこで、東京音楽学校出身であり文学的な才能にも長けていた妻くめに、作歌を依頼したのである。

2. 作詞者「東くめ」

1901（明34）年に民間から出版された《幼稚園唱歌》の編纂については、くめの功績によるところが大きい。一般にその名前は知られていない。くめは夫基吉の「子どもが楽しくなる歌を」という保育理論に基づき、〈お正月〉〈鳩ぽっぽ〉など口語体による作詞を行った《幼稚園唱歌》における中心的存在である。そこで、くめの経歴について整理しておきたい。

2-1. くめの生い立ち

くめは1887（明10）年に、和歌山県新宮市で誕生する¹⁴⁾。父甚五郎は、新宮藩主小野家の家老を務めていたが、くめが6歳の時に病死する。その後、一家は母の琴世の実家に身を寄せる。祖父「筒井新兵衛」は、紀州徳川藩の直臣で、居合術の指南として新宮に派遣されていた。祖母「吉彌」は孫のくめに、『古事記』など古典文学の歌や物語を読み聴かせていたという。さらに、くめは大叔父に、論語、詩経などを習う。1888（明21）年、仕事の関係で大阪に移住する祖父と共に大阪に移り、大阪ウィルミナ女学校（現：大阪女学院）に通う。そこで将来、音楽家を目指すことを決定する場面に遭遇する。そのことについて、くめは以下のように語っている¹⁵⁾。

「今でも忘れません。若くって、とても美しいアメリカ人の姉妹が、学校でピアノの連弾をしたのです。うっとりなっちゃって。それまでも、オルガンで賛美歌は歌っていましたが、ピアノは初めて。音楽って、こんなに素晴らしいものかと思いました」

くめは、女学校で聴いた美しい外国人姉妹による

ピアノの連弾の音色に魅了されて音楽家を志すようになり、東京音楽学校への入学を決意することになる。くめは東京音楽学校に入学し、専科から予科へと移る。東京音楽学校の同級生には、ヴァイオリニストとして有名な安藤幸子、永井幸次¹⁶⁾がいる。さらに、2学年下には滝廉太郎が在籍し、くめがつくった詩に滝が曲をつけていた。滝廉太郎はヴァイオリンを学び、15歳で同校に入学し研究科に進んだ後に助手として同校に採用されている。彼の作品には、〈荒城の月〉〈箱根八里〉などがあり、早くから世間に認められている¹⁷⁾。

くめは在学時代から雑誌『音楽』に〈友の歌〉〈竹生嶋〉を含め四篇の歌を発表している¹⁸⁾。1895（明28）年、くめが18歳の時に作った歌詞に滝廉太郎が作曲した歌〈四季の滝〉があるが、当時は出版に至らなかった。後にくめの歌詞が評価され、1937（昭和12）年、金子彦二郎編の国語の教科書『昭和女子国史』に、橋本雅邦の画とともに掲載されている¹⁹⁾。その後くめは20歳の春に、東京府立第一高女の教員になる。

2-2. 基吉との結婚

くめは22歳の時に、同郷人で、東京高等師範学校文科を卒業した東基吉と結婚する²⁰⁾。基吉は、1872年に新宮町横町において父須川利貞治、母フジの両親のもとに誕生するが、両親ともに幼い頃に亡くなったため、8歳にして東家に養子に入る。18歳で和歌山師範学校に入学し、23歳で東京高等師範学校文科に入学する。27歳の時に東京高等師範学校を卒業し、東京女子高等師範学校助教授と附属幼稚園批評掛を兼務する。基吉はこれまで幼児教育に関わったことがなく、懸命にフレーベルなどを研究していたが、妻くめに次のように語ったという²¹⁾。

「ねえ、君。今の日本の音楽の先生たちは、一体何をしてるんだろう。幼稚園の子供たちにまで、あんな難しい歌を歌わせたりして。話し言葉の唱歌があっても、よさそうなものだが。」

（下線は筆者による）

当時、東京府立第一高女の音楽教師であったくめは、夫の指摘通り幼稚園や小学校で歌われている歌の歌詞が、「たみくさの、さかゆるときと、なわしろ」といった文語体で難しいことに気付いたのである。くめはしばらく考えた後に、「あなた、わたしやってみますわ。新しい唱歌の作詞を」と言ったと

ある。そこで、最初につくったのが〈鳩ぽっぽ〉の詩である。滝廉太郎がくめの自宅に來訪し、基吉も同席する中で、〈鳩ぽっぽ〉の歌詞に曲をわずか約20分でつけたといわれている¹⁷⁾。

基吉は幼児教育に関する研究を進める中で幼稚園教育および家庭教育に関する論文を、フレーベル会²²⁾発行の雑誌『婦人とこども』に多数掲載する。くめは結婚後から、基吉が編集長である同誌に短歌を連載する。1903（明36）年5月に長男貞一が誕生するがくめは教員の仕事は続け、1904（明37）年7月より1906（明39）年7月までの約2年間、同誌に育児日誌「貞一の日記」を連載する。その後、くめは東京府立第一高女を辞職すると同時に、育児日誌「貞一の日記」も終了している。

基吉は1904年に『幼稚園保育法』という保育内容全般をあらわした著書を目黒出版から出版する。しかし1908年に宮崎県師範学校長に就任後は、『婦人と子ども』への掲載を終了している。それ以降、幼児教育に関する基吉の仕事は見あたらない。その後、基吉は栃木県、三重県、そして大阪府池田師範学校校長として歴任し、最後は池田市に定住する²³⁾。池田市に転居後のくめは、自宅でピアノのレッスン教室を始め、1957年には基吉との合作の歌集『皐月歌集・歌集惜春』を一燈園出版から出版する。ここには、くめが東京音楽学校在学中に創作した歌（由比姓）も含み43の歌が収められている²⁴⁾。

くめは、NHK「私の秘密」に出演したことから、作詞家としての功績を紹介される。その後、新宮市名誉市民称号の授与、新宮市駅前に「鳩ぽっぽ」の歌碑の建立、1963（昭38）年には池田市最初の文化功労賞の授与、池田市五月山公園に「鳩ぽっぽ」の歌碑、東京浅草観音堂境内に「鳩ぽっぽ」の記念碑などが建立され、くめの功績を称えている²⁵⁾。

3. 《幼稚園唱歌》

附属幼稚園で歌われている歌が難しいという東の幼児教育に対する理論が、妻くめと滝を動かし、新しく唱歌集を編纂することになった。その背景について述べる。

3-1. 《幼稚園唱歌》に対する基吉の理論

《幼稚園唱歌》の歌詞はくめをはじめとし、音楽学校時代の後輩である滝と鈴木毅一が作詞・作曲を担当して、簡易伴奏付きの20曲が誕生している。出

版にあたっては、児童文学で名声を得ていた巖谷小波の助言を得て²⁶⁾、民間の唱歌集として共益社書店から出版されている。これまでの文語体の歌詞とは異なり、幼児の生活の中に題材を求め、歌詞は口語体でできている。この《幼稚園唱歌》は、昭和8年には第11版と重版を重ね、長く人々に愛されてきたことがうかがえる。

前述のように、20曲中、次の13曲がくめ作詞、滝作曲とされている。

〈ひばりはうたひ〉〈鯉鱈〉〈海のうへ〉〈お池の蛙〉〈夕立〉〈かちかち山〉〈水あそび〉〈鳩ぽっぽ〉〈菊〉〈軍ごっこ〉〈雪やこんこん〉〈お正月〉〈さよなら〉

滝廉太郎作詞作曲、〈ほーほけきょ〉〈桃太郎〉〈雁〉

鈴木毅一作詞作曲〈猫の子〉〈白よこいこい〉〈風車〉佐佐木信綱作詞滝廉太郎作曲〈雀〉

「幼稚園唱歌」の歌詞の特徴として、①〈ひばり、菊、蛙〉など自然の風物を歌ったものが多いこと、②〈桃太郎〉といった子どもの昔話や〈水あそび〉など、子どもの日常生活に関する内容であること、③口語体で書かれた文章「言文一致」²⁷⁾の歌であること、が挙げられる。この3つの曲の特徴は、東基吉が記した「幼稚園保育法」第八章「唱歌」に示す内容と合致しているのである。基吉は「唱歌」の在り方について、次のように述べている。

トレシー曰く幼児が最も早くより音楽を解する力は頗る趣味ある問題なり。－略－

教育の上に於ける唱歌の功果も亦大なるもあり古来各國共に其價値を認めて教育の必要なる方便の一となせり。次に幼稚園に於て授くる唱歌につきて最も必要なる條件は先ず幼児の興味を惹起するに足るべきものを選擧すること之なり。－中略－

一、歌即唱歌の言語につきては又形式上及内容上より之を考へざるべからず。形式とは唱歌の意味を顯はす文章をいひ内容とは歌詞の顯はす意味をいふ。

(い) 歌詞の形式。幼児の興味を惹起するに適する普通の形式の一は先づ同一の音若くは同一言語の反覆よりなること之なり。こは幼児の常に口にする童謡を見て知るべし。

例令ば 夕やけ小やけあした天気になーれ

かーごめかごめかごの中の鳥は
おん正正月お正月松たて、竹たて
蓋し同音の再三繰り返さるゝことは自ら發聲を
容易ならしめ従つて之が為に愉快の感情を興ふるものにして普通の言語に在りても幼児の言ふ所のものは大抵皆同音より成るによりても知らるべし。(下線は筆者による)

これは一部であり、その他、曲についての注意事項が詳細に記載されている。これを、口語に直して要約すると次のようになる。

- ① 歌詞は通常幼児の口にする童謡²⁸⁾から考える必要があり、「雨雪風雷日月山河」の自然現象、子どもにとって日常親近な「鳥獸魚蟲」、植物の美しさ、遊戯や物語の歌、および汽車、汽船、水車、風車など観察経験できるものにする。
- ② 道徳の眞理を説くような唱歌の価値は低い。楽曲は歌詞と同様に、大人の感情に適したのではなく、幼児の興味から判断することとする。
- ③ 旋律は、音域の範囲を狭くし、高低の変化も大きくならないようにすること、旋律は反復すること、半音が少ないこと、学校の児童よりも幼児の方が唱歌を授けることが多いが、幼稚園では文字を未だ理解する力はないため、口と口とを以て一語ずつ暗唱させることなどである。そのためには、簡単に理解しやすい言語を用いると記憶しやすい。
- ④ 指導法は、新しい唱歌を教える時には10分から15分かけるが、最初から幼児が興味を示すことは困難である。また、発音発声は自然に矯正し、常に美しい聲で歌うこと。怒鳴り聲は咽喉を痛める。音聲の美しさを求め、唱歌の意味を理解するために繪画があること。さらに、唱歌に身振りや遊戯をつけると具体的、直感的になり、興味が増すとともに理解が容易になる。

これら基吉の考え方は100年以上前に出されたものであるが、現在でも十分に通用する。

3-2. 《幼稚園唱歌》に対する滝廉太郎の理論

《幼稚園唱歌》の冒頭に、「緒言」と「凡例」がある。「緒言」は編者識によると書かれているが、氏名は不明である。「緒言」では、本書を出版する主旨として、これまでの音楽唱歌の多くが小学生の児童を対象としているのに対して、ここに収められて

いる新しく創作された唱歌20曲は、家庭にいる子どもや幼稚園における子どもを対象としていることが、冒頭で述べられている。そのため歌詞が小さい子どもにもわかりやすいこと、曲のメロディが簡単であること、音域が子どもに合っていることを念頭に、作歌を経験深い先生方に依頼しているとある。

「凡例」は、滝廉太郎によって書かれている。「凡例」では、歌の用い方に関する諸注意が5項目記されている。滝はこれまでの唱歌にあった文語体の歌詞ではなく、「言文一致」の唱歌であることを述べている。

「凡例」の5項目を原文のまま記す。

- 一、本書載する所の歌曲の品題は、児童が日常見聞きする風物童話等に取り、主として四季の順序に排列し下れば教師は其期節の折々に應じて適當なるものを撰み先づ、談話問答等に由りて、児童の興味を喚起せしめ、然る後一句づつ口授するを宜しとす。

一、歌曲の速度は、決して緩慢に流れるべからず、寧ろ教則なるべし、なほ本編収むる所の歌曲は、凡て遊戲に添ひ得べきものなれば、或は適當の動作等を加へて以て一層の興味を添ふるをよしとす。

一、唱歌の方法は活潑なるべし、然かよく児童の發音に注意し決して粗暴なる叫聲を發せしむべからず、又児童の歡心を買はんとて、徒らに多數の曲を教ふるはよろしからず、甲の歌曲充分熟練して後、はじめて乙の歌曲にい移るべし。

一、本書の歌曲は、其興味を助けん為め、凡て伴奏を附したり、然れどもこは先づ口伝授を以て、児童の大抵熟練した後、樂器を添へて歌はしむる際に用ゐんが為めにして、初めより教授に伴はしめんが為めにはあらず。

一、本書歌詞の假名遣ひは、凡て文部省新定の方法に由りたり。

滝が「凡例」において示す内容は、主に歌唱指導上の注意点である。口語にして要約する。

- ① 本書の唱歌は児童の日常生活に密着した題材を選び、幼稚園で用いやすいように四季の順に並

べている。教師は季節に合う歌を選び、談話の中で子どもたちと問答を繰り返して興味を抱かせてから、一句ずつ口伝えして指導する。

- ② 歌のテンポはゆったりではなく、早いテンポで教えること。凡ての曲は遊戲に使用したり、適当な動作を付けることで子どもの興味をさらに高めることができる。
- ③ 指導上の注意として、子どもたちが乱暴な声の出すことを慎むようにすること、また子どもの関心を得るために多くの曲を教えるのではなく、一曲を熟練した後に次の曲に移ること。
- ④ すべての曲には使用する人に興味をもってもらうように伴奏を付けている。しかしながら、最初から伴奏を付けるのではなく、口伝えで子どもたちに教え、十分に子どもたちが歌えるようになってから、伴奏をつけること。最初から樂器を使用して歌を教えてはならない。
- ⑤ 本書の歌詞のかな使いは、すべて文部省の新しい方法を用いている。

このような「凡例」から、滝廉太郎は唱歌の用い方として、まず幼い子どもが興味を喚起させたいうで発声の方法や指導の手順などを述べていることがわかる。これらの内容は、前述の基吉の「幼稚園保育法」第八章「唱歌」の記載の部分と重なる箇所が多い。すなわち、「凡例」が書かれた背景に、保育内容を師範学校で教授していた基吉と、音楽教員であったくめの影響が強いことがうかがえる。くめは音楽に精通するだけではなく、幼児期からの文学的教育により文学の表現に熟知していたため、幼児が理解しやすく韻を踏んだ言葉で歌詞を書くことは、容易な作業であったと推測される。

このような経緯で作られた唱歌に対して藤田は、大正期の芸術童謡に比べて「低俗な口語唱歌」と批判している²⁹⁾。しかし、《幼稚園唱歌》は20曲中16曲がわらべうたの構成音³⁰⁾である半音の無い五音音階でできているため子どもにとって歌いやすいものであった。このような意図を持った《幼稚園唱歌》は、文語体の唱歌が多い時代に子どもが親しみやすく分かりやすい口語体の唱歌集をつくるといった、画期的な作品といえるだろう。

3-3. 《幼稚園唱歌》の特徴

日本で初めて幼児を対象に作られた言文一致の歌集《幼稚園唱歌》(1901年出版)の特徴について検

表1 幼稚園唱歌の分析

	作詞者 作曲者	調 旋法	拍子	音階*	音域**	小節 数	特 徴
ほうほけきょ	滝廉太郎 滝廉太郎	ヘ長	2/4	六音音階	ハ ¹ ～ニ ²	32	変則的三部形式 問答を3回繰り返す。最後の鶯の泣き声「ケ キョ」は、文部省音楽取調掛『幼稚園唱歌集』 第十五〈花さく春〉にも見られる
ひばりはうたひ	東くめ 滝廉太郎	ト長	4/4	五音音階	ト ¹ ～ニ ²	24	ABAの三分形式
猫の子	鈴木毅一 鈴木毅一	ト長	2/4	六音音階	ト ¹ ～ホ ²	10	変則的な一部形式。歌詞に合わせて曲が作ら れている 擬音「チリリンリン」が可愛い
鯉 幟	東くめ 滝廉太郎	ト長	2/4	五音音階	ト ¹ ～ホ ²	16	a, a', b, a" の典型的な二部形式 モチーフが同じリズム
海のうへ	東くめ 滝廉太郎	ヘ長	2/4	五音音階	ハ ¹ ～ハ ²	20	後半が12小節の変則的な二部形式 CFACの主和音の構成音が旋律に多様されて いる。
桃太郎	滝廉太郎 滝廉太郎	ト長	2/4	五音音階	ニ ¹ ～ホ ²	16	一部形式
白よこいこい	鈴木毅一 鈴木毅一	ト長	2/4	五音音階	ト ¹ ～ニ ²	16	一部形式 ピョンコ節（タッカ）のリズム 歌詞に反復がある
お池の蛙	東くめ 滝廉太郎編	ト長	2/4	五音音階	ニ ¹ ～ニ ²	8	一部形式 擬音
夕 立	東くめ 滝廉太郎	ト長	2/4	五音音階	ニ ¹ ～ニ ²	16	一部形式で前半と後半は同じ旋律 主音で終わらないため、終止感が無い 擬音、歌詞の反復が多い
かちかち山	東くめ 滝廉太郎	ニ長	2/4	五音音階	ニ ¹ ～ニ ²	16	一部形式 ピョンコ節のリズム 擬音
水遊び	東くめ 滝廉太郎	ト長	2/4	五音音階	ニ ¹ ～ニ ²	12	一部形式 擬音
鳩ぼっぼ	東くめ 滝廉太郎	ヘ長	4/4	五音音階	ハ ¹ ～ニ ²	12	一部形式 変化に富むリズム 擬音 子どもが鳩に呼び掛ける歌詞
菊	東くめ 滝廉太郎	ト長	4/4	六音音階	ニ ¹ ～ニ ²	16	a, a', b, a" の典型的な二部形式
雁	滝廉太郎 滝廉太郎	ヘ長	4/4	五音音階	ヘ ¹ ～ハ ²	16	a, a', b, a" の典型的な二部形式 モチーフが同じリズム
軍ごっこ	東くめ 滝廉太郎	ト長	4/4	五音音階	ニ ¹ ～ニ ²	16	二部形式 付点二分音符の後に八分音符が2つ続くリズ ミカルな曲
雀	佐佐木信綱 佐佐木信綱	ヘ長	2/4	五音音階	ニ ¹ ～ニ ²	16	二部形式 跳躍が少ない 1番2番で子ども雀の会話になっている。
風 車	鈴木毅一 鈴木毅一	ヘ長	2/4	五音音階	ヘ ¹ ～ニ ²	12	一部形式 タッカのリズムがほとんどであるが、伴奏形 態からゆっくりの曲になるのではないだろう か
雪やこんこん	東くめ 滝廉太郎	ハ長	2/4	六音音階	ハ ¹ ～ハ ²	16	一部形式
お正月	東くめ 滝廉太郎	ヘ長	4/4	五音音階	ヘ ¹ ～ハ ²	12	一部形式 (小さな三部形式 a, b, a')
さよなら	東くめ 滝廉太郎	ト長	4/4	五音音階	ニ ¹ ～ロ ¹	20	16小節の1部形式に集結部の4小節が加わ る。 ドレミソラの5音でできている

* 「五音音階」はファシ抜きといわれるヨナ抜き長音階。「六音音階」は五音音階にファの加わったもの

** 音域の表示例として、一点ハ音は「ハ¹」、二点ハ音は「ハ²」と表している。

討する。それぞれの歌の調旋法、拍子、音階、音域、小節数、形式などの特徴を表1に示す。

上記の表1《幼稚園唱歌》の特徴は、以下の通りである。

【調旋法】ト長調11曲、ヘ長調7曲、その他ハ長調とニ長調が1曲ずつである。ト長調とヘ長調の場合、主音が音域の中心付近にくる。ト長調のうち4曲、ヘ長調全てが主音から始まる。音域の中心は主音で、その主音から始まるという特徴は、子どもの歌いやすさを配慮していると考ええる。最も高い音は2曲を除き一点二音で、9度の音程内に収まっているため歌いにくさが感じられない。

【拍子】2/4拍子と4/4の単純拍子だけである。3/4拍子や6/8など当時の日本人にとって馴染みがない拍子の歌は含まれていない。

【音階】1曲中に1ヶ所だけ経過音として第4音が存在する歌もあるが、半音がない五音音階の歌がほとんどである。これは、東基吉の論であるわらべうたの要素を取り入れたもので³¹⁾、作曲をするうえでのこだわりが滝により反映されているといえるだろう。半音という微妙な音程が無い歌は、幼い子どもにとって歌いやすいといえるだろう。

【音域】最も低い下の音は一点ハ、最も高い上の音は二点ニがほとんどである。

【小節数】小節数は、8小節が1曲、10小節が1曲、12小節が4曲、16小節が10曲、20小節が2曲、24小節が1曲、32小節が2曲である。16小節が最も多く、12小節と続く。〈ほうほけきょ〉のように32小節と長い曲もあるが、問答唱歌となっている。

【特徴】旋律の形式は、一部形式が12曲、変則的なものも含め二部形式が6曲、小さな三部形式の歌が2曲である。歌詞に合わせた作曲がなされているため、形式が変則になっている歌もある。同じリズムの繰り返し、擬音、順次進行が多様されている。

くめと滝が中心となって作られた《幼稚園唱歌》の大きな特徴として、まずほとんどの歌が五音音階できていることから半音が無く歌いやすいことが挙げられる。ト長調とヘ長調が多いが主音が音域の中心にあり、主音から始まる歌が多いため歌いやすい。高い音のほとんどが二点二音で、拍子は2拍子系だけである。小節数は16小節で2/4拍子からなる曲が最も多い。曲は、雨雪風雷の自然現象、日常親

近な生物、植物、汽車、汽船、水車、風車など観察できるもの、遊戯に用いられる曲、物語を素材にしたものである。これらの傾向は、基吉の主張とほぼ合致している。また、基吉は同音の繰り返しを求めているが、〈白よこいこい〉の歌詞は、「白よこひこひ、黒よこひこひ」、〈夕立〉の歌詞は、「かちかちなるのは何の音、かちかち山だよ、この山は」などの反復がみられる。擬音が多く、子どもが鳥などになりきるような工夫が凝らされている。これらの特徴から、《幼稚園唱歌》幼児の認知や興味を踏まえて作られた歌集であることがわかる。

3-4. 文部省音楽取調掛編纂《幼稚園唱歌集》(1887年出版) との比較

次に、当時の幼稚園で使用されていた文部省音楽取調掛編纂《幼稚園唱歌集》の歌の調旋法、拍子、音階、音域、小節数、リズムや歌詞などの特徴を表2にあらわす。

文部省音楽取調掛編纂《幼稚園唱歌集》の歌の特徴については、以下の通りである。

【調旋法】ト長調10曲、ヘ長調9曲、ハ長調、ニ長調、イ長調、変ホ長調などがある。〈大原女〉のようにニ短調からヘ長調に転調している曲や、〈風ぐるま〉のように陽音階(レミソラドレ)でホ調レ旋法(終止音の音名と階名)の曲や〈数え歌〉のように陰音階(ミファラシドミ)で嬰ヘ調でシ旋法(終止音の音名と階名)の曲もある。ト長調が最も多いが、半数以上の歌が主音のGから始まっている。

【拍子】2/4拍子が12曲、4/4拍子が10曲の他に、6/8の歌が多数ある。日本人にとって馴染みのない6/8の曲は、拍子感に慣れるまでに時間を要すると考えられる。

【音階】全音階が多く占めている。六音音階が7曲、半音が無く歌いやすい五音音階の歌は3曲だけである。その他、七番目の導音が無い曲も7曲ある。このように、全音階が多い理由として、外国曲をそのまま使用していることが原因と考えられるが、これが《幼稚園唱歌》と大きく異なる点である。

【音域】下の音は一点ト音、上の音は二点ヘ音まである。音域が広いうえに、上の音が二点ヘ音の曲が4曲、二点ホ音の曲が8曲と、子どもが歌うには高すぎると思われる曲が多い。〈操練〉のよう

表2 幼稚園唱歌集の分析(1)

題名	作詞者 作曲者	調 旋法**	拍子	音階	音域	小節 数	特 徴
心は猛く	里見義 ³²⁾ メイソン	ヘ長	2/4	全音階	ハ ¹ ～ \flat ロ ¹	16	a, a', b, a" の二部形式
蝶々	野村先足 ³³⁾ 稲垣千顕 原曲スペイン民謡*	ト長	4/8	ドレミ ファン	ト ¹ ～ニ ²	16	最初の音が二点ニという高い音で始まっている 現在もよく歌われている
進め進め	加部巖夫 ³⁴⁾ 原曲フランス民謡*	ヘ長	2/4	全音階	ハ ¹ ～ニ ²	24	前半の16小節で一部形式ができ、後半の8小節は繰り返している
霞か雲か	ハインリヒ・ホフ マン ³⁵⁾ 加部巖夫* ドイツ民謡	ニ長	4/4	六音音階	ニ ¹ ～ニ ²	12	小さな三部形式 最初の1小節で跳躍する
学べよ	不明 アメリカ曲	変ホ	4/8	全音階	\flat ホ ¹ ～変ホ ²	8	一部形式 順次進行もあるが、二点ホが連続する 前半の4小節と後半の4小節が同じリズム
にはつ鳥	不明 不明	ハ長	6/8	全音階	ト ¹ ～ホ ²	8	一部形式 6/8拍子、アウフタクト 長6度の跳躍がある
友どち	不明 不明	ト長	4/4	五音音階**	ニ ¹ ～ニ ²	20	形式不明 一点トから二点ホに跳躍する箇所がある 四分音符と八分音符の繰り返しでできている
子供子供	伊沢修二 伊沢修二	ト長	2/4	六音音階**	ニ ¹ ～ニ ²	12	一部形式 面白いリズムでできているが、まとまりが感 じられない曲 最後に日本的な旋律がある
若 駒	ハインリヒ・ホフ マン ³⁶⁾ ドイツ民謡	ト長	2/4	全音階	ニ ¹ ～ニ ²	12	一部形式(小さな三部形式) 順次進行が多い。
大原女	ドイツ民謡	ニ長	6/8	全音階	ニ ¹ ～ホ ²	8	一部形式 6/8拍子、アウフタクト 二点ホの連続音がある
川瀬の千鳥	不明 メイソン	ニ短か らヘ長	6/8	全音階	ニ ¹ ～ヘ ²	12	変則的二部形式 ニ短調からヘ長調に転調 6/8拍子 二点への高い音がある
竹むら	不明 不明	ト長	6/8	全音階	ニ ¹ ～ニ ²	8	一部形式 6/8拍子、アウフタクト 一点ニから二点ハに跳躍する
雨霧	不明 ドイツ民謡****	変ホ	6/8	六音音階	\flat ホ ¹ ～ \flat ホ ²	10	一部形式 (小さな三部形式 a, b, a') a, a' は3小節 でbのみ4小節で変則的であるのは、歌詞に 合わせたのであろう
冬の空	不明 ウィルヘルム	ヘ長	4/4	六音音階	ヘ ¹ ～ニ ²	16	二部形式 アウフタクト リズムの反復が多い
花さく春	伊沢修二 伊沢修二	ト長	4/4	六音音階	ト ¹ ～ホ ²	24	変則的な二部形式 『幼稚園唱歌』掲載の滝廉太郎作詞〈ほうほ けきょ〉にある鶯の鳴き声「ケキヨ」がみら れる
やよ桜	不明 メイソン	ヘ長	4/4	全音階	ハ ¹ ～ヘ ²	8	一部形式 前半4小節の旋律が〈かつこう〉と似ている 二点への音がある 一点ハから一点イに跳躍する
燕	不明 ドイツ歌集****	ト長	4/4	全音階	ニ ¹ ～ニ ²	11	一部形式 11小節と変則的
真直に立てよ	不明 ドゥナイ	ヘ長	2/4	全音階	ハ ¹ ～ヘ ²	56	まとまりが感じられない曲 2/4拍子ではあるが、1番が56小節と長い

表2 幼稚園唱歌集の分析 (2)

題名	作詞者 作曲者	調 旋法**	拍子	音階	音域	小節 数	特 徴
我大君	不明 不明	ヘ長	4/4	全音階	ヘ ¹ 〜ヘ ²	22	形式が明確でない 一点トから二点ヘに跳躍 22小節と変則的
ここなる門	加部厳夫 ³⁷⁾ 伊沢修二	ト長	4/4	全音階	ニ ¹ 〜ハ ²	8	一部形式 終止部分が日本的な旋律
うづまく水	中浜万次郎訳 フランスの古歌	ト長	2/4	六音音階	ト ¹ 〜ホ ²	24	三部形式 「キラキラ星」として、現在も歌われている 順次進行が多い
環	イギリス民謡	ヘ長	2/4	六音音階	ヘ ¹ 〜ニ ²	20	三部形式 8分音符が連続したリズム
毬	不明 不明	イ長	2/4	全音階	ホ ¹ 〜ニ ²	18	二部形式 最初と中間の4小節は同じ旋律2小節の反復、最後の8小節も同じ旋律4小節が反復する
兄弟妹	不明 不明	ヘ長	4/4	全音階	ホ ¹ 〜ヘ ²	20	変則的な二部形式 フェルマータと8分休符が2ヶ所ある
操練	不明 ドゥナイ	ヘ長	2/4	全音階	ハ ¹ 〜ニ ²	10	一部形式 一点ハから二点ニへと9度の跳躍がある
風ぐるま	豊田英雄**** 東儀季照	ホ調 レ旋	2/4	五音音階（陽 音階＝ファシ 抜き）	ニ ¹ 〜ホ ²	16	一部形式 陽音階の四七抜き ホ、レ旋法（日本音階については、調の音名と階名を示した）
蜜蜂****	ボヘミア民謡	ト長	2/4	ドレミファソ	ト ¹ 〜ニ ²	12	小さな三部形式 現在も歌われている
一羽の鳥	不明 不明	イ長	2/4	全音階	嬰ヘ ¹ 〜ホ ²	14	二部形式 アウフタクト 高二点にから一点ヘに長6度下がる箇所が歌いにくい
数へ歌****	伊沢修二 原曲近世俗謡*	嬰ヘ短 調 シ旋	4/4	五音音階（陰 音階＝レソ抜 き）	ト〜ホ ²	14	一部形式 陰音階（レソ抜き） 日本的な旋律で10番まである

* 金田一晴彦・安西愛子1977「日本の唱歌上」明治篇講談社文庫による

** 「風車」「数え歌」の調、旋法については、調を終止音の音名、旋法を終止音の階名で示している

*** 「五音音階」はファシ抜きのいわゆるヨナ抜き長音階（「風車」「数え歌」を除く）。「六音音階」は五音音階にファの加わったもの

**** 安田寛2000「日本最初の唱歌音楽会～小学唱歌集」『原典による近代唱歌集成 解説・論文・索引』ビクターエンタテインメントによる

に隣り合う音の音程が9度という音の跳躍幅が広い曲や、音域の変化が大きくて歌いにくい曲など、子どもの発達の観点から考えると相応しくないものが含まれている。

【小節数】8小節から56小節まで様々である。

【特徴】〈冬の空〉や〈花さく春〉など自然現象を歌った曲も含まれている。しかしながら、歌詞が文語体であったり教訓的なものがあり、子どもがその意味を理解することは難しいものが多数ある。〈蝶々〉やキラキラ星として知られていう〈うづまく水〉は、現在も知られている歌の音域は狭く、歌詞も分かりやすい。全体的にリズムカルな曲が多いが、時には音の跳躍幅が広いことや、二点ホ音や二点ヘ音が使われているため歌いにくい面もある。また、アウフタクトも用いられている。

次に、楽譜上から東らによる《幼稚園唱歌》と、文部省《幼稚園唱歌集》を比較する。

3-5. A〈夕立〉とB〈操練〉との楽譜上の比較

東らによる《幼稚園唱歌》（「A」とする）が、文部省《幼稚園唱歌集》（「B」とする）とどのように異なるのかA〈夕立〉とB〈操練〉を比較する。

A〈夕立〉の楽譜

夕 立

東くめ 作詞
滝 廉太郎 作曲

B〈操練〉の楽譜

操 練

文部省音楽取調掛

イ マ ヨ リ ワー レー ラ ハ サウー レン ハ ジ メ ニ ヨ ク デ キ
 ざー りん すー ーの は べい し お な く あ し な み
 ー ホ キ ナ コー ドー モ モ チ イ サ キ コ ド モ ニ ギ ヲ

ター ルー ハ カ シ ラ ト ナー リー テ サ シ ズ セ ヨー
 そー るー ーヘ カ ウ タ を も うー たー ひ す す め よー
 ワー カー レ ワ ガ ヤ ニ カー ーヘー リ ア ス モ ヨー

まず、一番の歌詞を比較する。

〈夕立〉の歌詞

「ゴロゴロなるのは雷よ、ぴかぴか光るは稲光、
 ザーザー降るのは夕立よ、ザーザー、ピカピカ、
 ゴロゴロゴロ」

〈操練〉の歌詞

「今より、我らは操練始めん、よくできたは、
 頭となりて、指図せよ」

〈操練〉の歌詞は日常的に使用する言葉ではない
 うえに教訓的であるのに対して、〈夕立〉の歌詞は、
 幼児が歌詞の意味を理解して歌うことができる言葉
 である。さらに擬音が多く、応答唱ができる愉快的な
 曲である。

音階については、〈操練〉は半音を含む全音階で
 ある。また4小節目から5小節目にかけて9度の跳
 躍や16分音符の連続など、口を器用に動かすことが
 難しい幼児には、歌いにくい。一方、〈夕立〉の音
 階は五音音階で、半音を含まないため歌いやすい。
 さらに、前半の4小節のモチーフが3回反復されて
 いるため記憶しやすい。

このような比較において、B〈操練〉の歌詞や旋
 律が幼児にとって難解であるのに対して、Aは幼
 児に歌いやすく、歌詞の内容も楽しめることがわか
 る。東らによる唱歌の創作は、これまでの文語体の
 歌詞を口語体の親しみやすい歌詞に変えたこと、わ
 らべうたの音階を用いて日本人の子どもにとって歌
 いやすい旋律をつくることを意識していることが分
 かる。

4. 歌詞の類似

くめは、《幼稚園唱歌》にある歌の歌詞や曲調を
 後世の人が書き換えて、歌詞や題名の似た曲が、文
 部省唱歌としてあらわれてきたことを、残念に思っ
 ていることが後に判明している。例えば、くめは
 〈鳩ぽっぽ〉の作詞をしているが、現在一般的に知

られている曲は、文部省唱歌の〈鳩〉である。「ぽっ
 ぽ」という歌詞の使い方が類似しているのである。
 くめの次男（良二）の嫁である由比照子（夫の母方
 の実家名を継ぐ）によると、くめは次のように本音
 を語っていたという³⁸⁾。

「ぽっぽで始まると鳩ぽっぽだか汽車ポッポだか
 わかりやしない。私は初めから鳩ぽっぽとうた
 い出してるんだよ。それに食べたらみんなで飛
 んで行けなんて、食べ立ちする様なお行儀の悪
 いことを教えてないよ。食べてもすぐに帰らず
 にぽっぽぽっぽと鳴いて遊べってみんなで仲良
 くする様に教えているんだよ。文部省の歌が出
 た時、よっぽど文句を云おうと思ったけれど、
 私が騒ぐと誰か若い人が傷つくだろうし、その
 人の一生に影響すると気の毒だから我慢したん
 だよ」

当時は著作権について厳密な決まりが無いことも
 あるが、くめがかかわった歌のいくつか、作り変
 えられて世に出ている。《幼稚園唱歌》には、〈鯉轍〉
 〈雪やこんこん〉〈さよなら〉があるが、現在では後
 発の方が主流になっている。そこで、くめ作の〈雪
 やこんこん〉と作者不詳の歌詞を比較する。

東くめ〈雪やこんこん〉

「雪やこんこん、あられやこんこん。もっと
 ふれふれ、とけずにつもれ。つもった雪で、
 だるまや燈籠。こしらへましょー。お姉さ
 ま。」

作者不詳『尋常小学唱歌』1911（明44）年 第二
 学年用〈雪〉

「雪やこんこ、あられやこんこ 降っては
 降ってはずんずん積る 山も野原も綿帽子か
 ぶり 枯木残らず花が咲く。」

山田はこのような著作権が曖昧であることについ
 て、「作詞、作曲者名がなく、今ならさしずめ盗作
 とか偽作とか問題になるところだろう」と述べてい
 る³⁹⁾。当時は作詞・作曲者名を出さないことが普通
 であったがために、知らないままにこのような現象
 が起きてしまったのであろう。ただ作詞・作曲者名
 が明確にならないままに、《幼稚園唱歌》が全国的
 に広まった。

おわりに

表1と表2から、くめ基吉らによる《幼稚園唱歌》(「A」)と文部省音楽取調掛編纂《幼稚園唱歌集》(「B」)を比較した結果、次のような差異が見出された。

- ① 拍子について、Aは単純拍子だけであるが、Bは6/8等の複合拍子が含まれている。
- ② Aのほとんどが五音音階でできているのに対して、Bは全音階が多く半音が含まれている。
- ③ 高音については、Aは二点二音であるのに対して、Bは二点へ音までと高い。
- ④ Aは順次進行が多いのに比べて、Bは6度以上の跳躍が頻繁にみられる。メロディとしての魅力は感じられるものの、子どもが歌うには難しい面がある。
- ⑤ 滝廉太郎らの作曲による旋律が単純なAに比べて、外国曲が多いBはアウフタクトなどが用いられ複雑である。

AとBの曲集を比較した結果、1901年に誕生したAの《幼稚園唱歌》は、1887年に出版されたBの文部省音楽取調掛編纂《幼稚園唱歌集》における音楽的な難しさを解消したものと考えられる。

本研究を通してくめと滝は基吉の保育論に従い、日本で初めて口語体による歌を作った経緯を確認することができた。《幼稚園唱歌》が作歌されたのは、くめが結婚して間もないころで、まだ自身の子どもに恵まれていなかったが、子どもの心情を十分に歌いあげた歌詞になっている。また擬音が多く用いられ、幼い子どもにとっては歌詞を記憶しやすく、発音しやすいなどの配慮が感じられる。《幼稚園唱歌》のほぼすべての作品が、五音音階でできていることは、滝廉太郎の功績であるといえるだろう。さらに、それまで歌われていた文部省《幼稚園唱歌集》とは、歌詞の内容および旋律の動きの点で異なる。《幼稚園唱歌》は、幼稚園児の年頃の子どもの成長と発達を意識した歌集であることが分かる。

基吉が幼稚園批評掛をしていた附属幼稚園では、文部省の《幼稚園唱歌集》やそれ以前に作られた『保育唱歌』が歌われ、東、くめ、滝の思いが込められた《幼稚園唱歌》の歌はあまり好まれなかったという⁴⁰⁾。その原因として、『保育唱歌』が、附属幼稚園の先輩教諭である豊田英雄が作詞をした作品もあること、美的な面から文語体への憧れや旋律が

西洋風で新しい雰囲気醸し出していることがあったのかもしれない。ここには、大人が好む歌と、子どもの発達に合わせた音階からなる素朴な歌とのズレが生じていたと考えられる。基吉はフレーベルをはじめ、幼児の発達についての研究を行っていたことが、幼稚園における唱歌について疑問を呈したものと考える。妻くめが音楽と文学に精通し、作曲者滝が身近に存在したことで、民間から出版された歌集として成立したといえるだろう。

《幼稚園唱歌》が誕生したきっかけとなる三人の言葉がある。

まず、唱歌を新たに作ることを提案した前述の東基吉の「幼稚園の子供たちにまで、あんな難しい歌を歌わせたりして。話し言葉の唱歌があっても、よさそうなものだが。」という言葉がある⁴¹⁾。それに応える妻くめは、「あなた、わたしやってみますわ。新しい唱歌の作詞をやってみますわ。新しい唱歌の作詞を」⁴²⁾と話し言葉を歌にするという新しい決意を語る。当時は文語体の歌詞が主流であったため、口語体への転換は勇気のいることだったと推測する。国文学に長けていたくめだからこそ、可能だったと考える。くめから作曲を依頼された滝廉太郎は次のように語っている。

「西洋の曲を借りてきたのでは、やはり難しいものになってしまうでしょうから、まず、東さんが子どもにもわかるやさしい歌を作ってください。それに私がやさしいふしをつけましょう。幼稚園の先生方にも弾きやすいような伴奏をつけましょう」⁴³⁾という発言である。《幼稚園唱歌》は、幼稚園教諭が歌を用いやすいように初めて、簡易伴奏がつけられた歌集である。基吉の唱歌理論が妻くめと滝の心を動かし、幼い子どもたちの視点に立った唱歌の必要性を感じたことで、《幼稚園唱歌》が完成したことがわかる。明治という日本の幼児教育の黎明期に、伴奏譜付き口語体の唱歌《幼稚園唱歌》が果たした役割は大きい。

註釈・引用文献

1. 《幼稚園唱歌集》は、1901(明治34)年に合資会社共益商社書店から発行された。昭和8年まで重版された当時は五十銭であった。新宮市立図書館蔵書
2. 遠藤宏1950「滝廉太郎の生涯と作品」『音楽文庫11』音楽之友社74
また安田らの研究でも12曲となっている。安田寛2000「日本最初の唱歌音楽会～小学唱歌集」『原典に

- よる近代唱歌集成 解説・論文・索引』ビクターエンタテインメント106
3. 東貞一1959『はとぼっぼ60周年記念』一燈園印刷部 3
 4. 前掲 2) 36-44
 5. 読売新聞大阪本社社会部1987「鳩ぼっぼ東くめ一滝廉太郎の名コンビ」『実記・百年の大阪』朋興社 344-345
 6. 柿岡玲子2005「明治後期幼稚園保育の展開過程—東基吉の保育論を中心に—」風間書房192
 7. 音楽取調掛は、1879（明12）年に留学していた伊沢修二と目賀田種太郎が音楽教育実施のための調査研究機関の設置願いを、当時の文部大輔田中不二麿宛てに上申書として提出し、発足する。それにより「音楽学校」開設の準備が進められた。
 8. 東貞一1980「日本のフレーベル東基吉」『熊野誌第二十五号』熊野地方史研究会 3
 9. 前掲 6
 10. 東元りか 2009「保育唱歌解釈：明治16年清水たづ譜」2-3
 11. 上笙一郎・山崎朋子1965「幼稚園唱歌のあけぼの一東基吉・くめ夫妻—」理論社69-74
 12. 文部省音楽取調掛編算全 明治十四年十一月出版届 文部省蔵版々権有
 13. 東基吉1904『幼稚園保育法』—第8章唱歌—目黒書店65-71
 14. 油比照子1997「思い出すまに」『熊野誌第四十三号』 31
 15. 前掲 3) 344
 16. 永井幸次は、後に大阪音楽大学を創立する
 17. 小長久子1968「滝廉太郎」135
 18. 田中卓也2003《幼稚園唱歌》の研究—滝廉太郎・東くめの創作活動を中心に—『中国四国教育学会教育学研究紀要第49巻』42
 19. 谷奈々1999「近代日本の幼児文化創造者『鳩ぼっぼ』を作詞した東くめとその夫基吉」『紀州を知る⑪』和歌山社会経済研究所62
 20. 前掲19) 58
 21. 前掲 5) 344
 22. フレーベル会は、1896（明29）年4月のフレーベル生誕114回の記念日に、東京府下に組織されていた保育研究会と女子高等師範学校附属幼稚園の保母会が合同して結成された会である。『婦人と子ども』の後身が、日本幼稚園協会の編集で現在も続いている保育雑誌『幼児の世界』である。岩崎次男1979「近代幼児教育史」明治図書292、蛭水野浩志（日本保育学会著）「中村五六の『幼稚園摘葉』の内容」『日本幼児保育史第2巻』フレーベル館発行165-166
 23. 前掲10) 31-36
 24. 山崎千恵子1994「東くめ唱歌集」関西児童文学史叢書 7 63-71
 25. 東紘一郎1993「祖母の思い出」『熊野誌第四十三号』 28-29
 26. 前掲11) 72-76
 27. 明治20年代になり開国に伴い海外のさまざまな文化が紹介されたことで、「言文一致」運動が始まる。西洋の文学は「話し言葉」と「書き言葉」の区別の無い「言文一致」で書かれているため、日常的でわかりやすいその描写に感銘を受けた二葉亭四迷は、小説「浮雲」に反映する。
 28. 現在でいうところの「わらべうた」と思われる。
 29. 藤田圭雄1971『日本童謡史Ⅰ』あかね書房154
 30. わらべうたは、レを終止音としてラドレ、ラドレミ、ラドレミソなどのほぼ3音から5音で構成されているものが多い。
 31. 前掲11) 68
 32. 「心は猛く」の作詞は当時音楽取調掛にいた里見義で、作曲は伊沢修二の解説によるとロウエル・メーソンである。安田寛2000「日本最初の唱歌音楽会—小学唱歌集」『原典による近代唱歌集成 解説・論文・索引』ビクターエンタテインメント51
 33. 1番の歌詞は野村秋足で、2番は稲垣千穎である。原曲はメーソンがドイツの師範学校の教員であったハインリッヒ・ホーフマンの教科書から取って自著の『音楽掛図第1集』に収録した〈ボートソング〉であった。前掲32) 50-51
 34. 作詞は加部厳夫でロウエル・メーソンとジョージ・ウェップ編の『ザ・ジュヴナイル・シンギング・スクール（1837）』には、〈ちるどれん・ゴー・アンド・フロー〉として掲載されている。前掲32) 52
 35. 〈霞か雲か〉の原曲の歌詞について安田は、「ドイツの国歌の作詞者であるハインリッヒ・ホーフマンが1855年に作ったもので、メロディはオーストリアの民謡に基づいている。訳詩は、ホーフマンの歌詞の大意を取っているが、訳詩とは言い難い」と述べている。前掲32) 58
 36. 〈若駒〉の歌詞はハインリッヒ・ホーフマンの作である。前掲32) 59
 37. 〈ここなる門〉は、安田によると「作詞は1番と2番が加部厳夫、3番と4番が女子師範学校教員豊田芙蓉であるが、作曲者は不明」としている。前掲32) 52
 38. 前掲10) 33
 39. 山田新之輔1962「鳩ぼっぼのおばあさん」『朝日ジャーナル1962.年8月19日号』朝日新聞社69
 40. 前掲24) 75
 41. 前掲14) 99
 42. 前掲14) 99
 43. 前掲 5) 345